

彙報

一九九六年一月より
一九九六年二月まで

班研究

唐宋美術の研究

班長 曾布川 寛

一九九五年四月から五ヶ年の計劃で始まった本研究は、隋・唐・五代・宋代の美術全般についてより精確な理解を目指す。特に繁榮の極に達した盛唐美術を中心に、初唐からそこに至った過程、またそこから一轉して寫實的な山水畫や花鳥畫に代表される宋代美術を生むに至った背景を探る。具體的な方法としては出土や傳世の文物、石窟寺院の佛教美術、畫論・書論の藝術論を三本の柱として、發表と會讀を交えて進めていく。本年の藝術論の會讀は『益州名畫錄』（宇佐美文理擔當）を取り上げた。

- 一月二二日 京都精華大學所藏中國石刻拓本資料の調査 山名 伸生
- 一月二九日 天龍山石窟と盛唐彫刻 曾布川 寛
- 二月二日 唐・五代の耀州窯 出川 哲朗
- 二月一九日 大唐西域記所掲・摩訶刺佉國大都城城南宮伽藍觀自在菩薩像に関する試論 山岸 公基
- 二月二六日 大和文華館所藏石造四面像をめ

くつて

藤岡 穰

四月二二日 敦煌唐代石窟における瑞像表現

五月二三日 二十四孝圖の變遷 金 文京

六月一〇日 新出の興樂寺十一面觀音檀像について 松田誠一郎

六月二四日 泉屋博古館所藏南柏林寺弘願和尚銘畫像石棺について 外山 潔

七月 八日 エローラ石窟における文殊菩薩圖像の展開 定金 計次

一〇月二二日 白鶴美術館所藏唐代金銀器の調査 山中 理

一〇月二八日 畫の品第について 河野 道房

十一月三日 藤井有鄰館所藏宋代書畫の調査 曾布川 寛

十一月二八日 中國繪畫の四季表現 藤田 伸也

十一月二五日 中唐期における行書篆文碑の流行と『述書賦』 大野 修作

十二月 二日 瀟湘八景圖における中國 朝鮮 板倉 聖哲

法顯傳研究

班長 栗山 正進

三月をもって豫定どおり終了した。五世紀初頭に中央アジアからガンダーラ、中インドを経てスリランカにいき、マヒーシャーサカ部の律典を得、南海より中國に歸った法顯の行歴記は、當時の中央アジア、インドの佛教事情を敘述している。章巽『法顯傳校注』（上海古籍出版社、一九八五）をテキストにその注を讀みつつ、一九世紀の佛譯注一例、二〇世紀初めの英譯注三例、日本語譯注二例の諸譯を照合して、據るべき現代語譯を作成し、あわせて五世紀の中央アジアとインドを班員の専門分野である歴史、言語、宗教、考古、美術など多角視點をもって検討した。

譯經僧傳研究 班長 栗山 正進

譯經僧とは、インドや中央アジアから中國にやってくる、經典漢譯に參畫した佛教僧である。これらに關する情報は『高僧傳』『續高僧傳』『宋高僧傳』などに編纂されている。これらの傳記を班員の専門分野である歴史、言語、宗教、美術など多角視點をもって讀解検討し、四世紀―八世紀の、中央アジアから南アジアにわたる地域の歴史、文化、その他おおくの情報を引き出すことを目的とする。あわせて據るべき現代語譯を作成する。研究會は一九九六年四月から二〇〇一年三月まで隔週の月曜日（二時―五時）に文獻センター會議室で開催。本年度は改修工事のため七月以降休會とした。

中國語音韻史の研究 班長 高田 時雄

本研究は、一般の書目には著録されることの稀な明清の音韻學關係の資料を取り上げ、序跋や

凡例の會讀を通じて、その資料的性格を闡明し、明清の音韻史を辿ろうとするものである。最終的には、『小學考』の補編ともいべき明清の音韻學書の提要の作成を目的とする。四年目の今年度は、以下の資料に關する班員諸氏の報告を得た。
字彙(韻法直圖・韻法橫圖)(中前千里)、等音(木津祐子)

また、香港中文大學に留學中の吉川雅之が梅州地區客家語の概況を報告した他、楊劍橋氏(復旦大學中文系)を講師に招き「近代漢語的唇音合口問題」と題して特別講演を行った。

邊境出土木簡の研究

班長 富谷 至

私たちの研究班は居延漢簡や敦煌漢簡などの出土資料を古文書學的手法を通して讀み解くことを目的としている。本年度は『敦煌漢簡』(甘肅省文物考古研究所編 一九九一年、北京、中華書局)をテキストとして取り上げた。木簡現物によって研究することのできない私たちは、次善の策として同書所收の寫眞圖版による會讀を行い、同書の釋文とは別途に新しい釋讀・注解の作業を進めていく。

中國技術史の研究

班長 田中 淡

本研究班は、一九九一年四月から五年間の研究期間を終了した。すでに班員執筆による研究報告書の編集を終えて、まもなく刊行の豫定である。『哲匠録』疊山篇は、會讀した漢唐部分について大幅に増補したテキスト原稿の作成を完了しており、印刷刊行の方途を得たい。王禎『農書』については、すでに會讀を完了した分から近々に順

次定稿をまとめる作業に着手する豫定である。標記の期間におこなわれた研究發表はつぎのとおりである。

一月二三日 張家山竹簡「引書」の初歩的研究 高 大倫

一月三〇日 臺灣中部の民家の調査—一九五〇年以前の臺中縣・彰化縣を中心にして 許 雪姬

二月 六日 中國園林植物の考察 森村 謙一

二月一三日 大藏永常と王禎 堀尾 尚志

二月二〇日 高橋至時の惑星理論 嘉數 次人

〃 江戸中期の科學者像—澁川春海の場合 川和田晶子

二月二七日 深衣の構成に關する一考察 相川佳子

〃 明代における外國人の給賜織物 Hillegard Schedl

三月 五日 傷寒論の諸問題について 石田 秀實

三月二二日 中國人の夢 太平 桂一

中國技術の傳統

班長 田中 淡

「中國技術史の研究」に引き續いて、一九九六年から五年間の計畫で、中國技術の傳統と特質について検討を加えてゆく。基本的には生活科學技術を中心とするが、しかし前研究班の過程で臚げながらみえてきた中國技術史における研究課題は、特定の時代、分野に偏重しない。一般的には、技

術と科學の相關、技術者と社會、生活科學の特質、少數民族の技術、等々の主題に關わるであろうし、個別的には、農業、醫學、土木建築、紡績、數學、天文學、化學、その他の領域に擴がるであろう。會讀のテキストとしては、引き續いて元・王禎の『農書』農器圖譜の譯注作成をすすめてゆく。並行して、技術史の諸分野にわたる班員の研究發表を隨時おこなう。

標記の期間に、王禎『農書』農器圖譜・利用門の譯注を新井管司、末永高康、白杉悅雄、稻本泰生が擔當した。また左の研究發表がおこなわれた。

五月一四日 韓國數學史の諸問題 川原 秀城

六月一日 『黃帝內經』の「くるい」からみた頭首 佐藤 實

七月 九日 鱸魚雜說 中原 健二

九月二四日 中國科學史研究試論 塚原 東吾

十一月二六日 王莽明堂について 楊 鴻勳

中國の禮制と禮學 班長 小南 一郎

五年計畫で始められた本研究班は、第三年次に入った。研究班の中心になる活動は、「周禮」春官篇を賈公彥の疏によって讀み、經文と鄭玄注に譯注を施す仕事であって、本年度には、巫および史に關わる部分を読んだ。そうした會讀と並行し、班員によって、禮制度をめぐる、以下のような研究報告が行われた。

二月二七日 神亭壺に見る死者祭祀 小南 一郎

四月二三日 淮南子時則訓と月令

村田 浩

六月二五日 王國維明堂考

井波 陵一

七月 二日 卜辭に見る巫の火あぶり

淺原 達郎

一〇月二三日 中國古代の動物犧牲

岡村 秀典

一月二六日 王莽明堂汎論(科學史班と共同開催)

楊 鴻勳

一二月 三日 俎の出土例とその祭祀

間瀬 芳收

六朝道教の研究II

班長 吉川 忠夫

本研究班は三月をもって終了した。『眞誥』全二十卷の會讀の成果は、本誌第六八册以下に『眞誥』譯注稿」として分載中である。また『眞誥』と陶弘景とを主要なテーマとする論文集『六朝道教の研究』の刊行を豫定し、そのための研究發表を前年に引き續いて下記のごとく行った。

一月二四日 『眞誥』と『雲笈七籤』

坂内 榮夫

『眞誥』における日月論とその

周邊 加藤 千恵

一月三一日 『眞誥』に見える「羅酆都」鬼

界説 松村 巧

『眞誥』に見える「書」をめぐ

って 原田 直枝

二月一四日 『眞誥』と李商隱 深澤 一幸

六朝後半期の宗教的知識人 都築 晶子

二月二八日 『眞誥』における人の行爲と素

質について 龜田 勝見

『眞誥』における「形」「身」「體」

小笠 智章

三月 六日 書寫の歴史の中での陶弘景と

『眞誥』 興膳 宏

唐代宗教の研究

班長 吉川 忠夫

禪佛敎の興隆に象徴的に認められる唐代宗教の動きを、唐の神清撰『北山録』全十卷を會讀のテキストに取り上げながら究明する。神清は蜀の僧。蜀は宗教地理學的に見て興味深い地域である。四月二四日に『北山録』解題の發表を吉川が行った後、卷一の「天地始」と「聖人生」に關しては、『東洋文化研究所紀要』に『北山録』譯注が發表されているので、それについて検討を加えた。六月以降、擔當の班員が準備した譯注稿を基に卷二「法籍興」以下の會讀を行い、卷三「合霸王」のなかばまで讀み進んだ。

秦漢隋唐の文物資料 班長 淺原 達郎

本研究班では昨年に引き續き、出土文物に關する班員の研究發表が行なわれ、九六年三月をもってすべての日程を終えた。研究發表の題目は以下のとおり。

二月二一日 候粟君所責寇恩事考釋辨疑

淺原 達郎

文獻と情報

班長 勝村 哲也

研究方法と狀況は昨年と變りがない。ただ本年は改修工事で書庫の使用ができなため文獻班の仕事は調査に比重があつた。建仁寺兩足院は尾崎、

牧野を中心に五週に亘って調査し、金よつて三國志演義が覆刊された。對馬宗家の藏書は中嶋他四名の班員が二週に亘って調査し、朝鮮本を中心に約四〇〇〇コマを撮影した。

情報班は約六萬の漢字フォントを公開利用するための研究開發に重點がある。一〇月には中國電子工業部の張軸材、科學院の楊秀霞、中央研究院の謝清俊、アップル社のリー・コリンズの諸氏を招聘して、フォント並びに屬性の公開とパーソナルコンピュータへの實装のための研究について、評價を受けた。報告書を準備している。

一月 五日 東洋文化研究所藏現代中國書の電算化 岡本 サエ

一月二日 朝鮮本の話(承前) 藤本 幸夫

二月 二日 漢字典電算化工程報告

四月 五日 漢字典電算化工程報告

五月一〇日 漢字典電算化工程報告

五月一七日 明人文集の排列について 勝村 哲也

建仁寺兩足院の漢籍整理 牧野 和夫

六月 七日 漢字典電算化工程報告

六月二一日 張棧の金圖經 今井 秀周

七月 五日 漢字典電算化工程報告

七月一九日 輯佚の難と校書の難 池田 秀三

一〇月一八日 漢字典電算化工程報告

一〇月二五日 漢字典電算化工程報告

十一月 一日 漢字典電算化工程報告

一月一五日 漢字コードの四次元モデル

一月二二日 三史の話 丹羽 正之

一月二九日 漢字典電算化工程報告 尾崎 康

二月 六日 中國學關係データベース最近 (一九九六〜一九九七)の動向

二月一三日 漢字典電算化工程報告 勝村 哲也

梁啓超の研究―その日本を媒介とした西洋近代認識について―

班長 狹間 直樹

「梁啓超の研究」は、中國の近代世界認識形成、および近代西洋學術文化の攝取に多大な貢獻をした梁啓超の西洋近代文明攝取の過程を、その窓口になった日本の媒介作用に着目して研究しようとするものである。本班はほんらい三年の豫定であったが、論文執筆の準備のために一年延長し、本年度は論文原稿の提出とその討議にあてられた。ここ三年の研究蓄積の上に、多くの新知見を含む梁啓超論が披露され、研究報告用の論文が揃いつつある。本年の班員報告は以下のとおりである。

一月二二日 梁啓超の史學について 井波 陵一

一月二六日 梁啓超と傳統思想―『孔子』を中心として― 末岡 宏

二月 九日 小説界革命の周邊 山田 敬三

二月二三日 康有爲―新しい普遍原理としての大同世― 李 惠京

五月一七日 梁啓超にとつての日本

五月三一日 梁啓超の經濟思想 狹間 直樹

六月四日 梁啓超と文明の視座 森 時彦

六月二八日 梁啓超の佛學 石川 禎浩

九月二〇日 梁啓超の史傳 森 紀子

一〇月 四日 「嚴幼陵先生に與うるの書」をめぐって 松尾 洋二

一〇月一八日 梁啓超の「權利・自由論の「群性」―「民權救國」期を中心として― 村尾 進

一月 一日 梁啓超と社會主義 土屋 英雄

一月一五日 近代文學觀念形成期における梁啓超 江田 憲治

一月二三日 梁啓超と日本の中國哲學史研究 齋藤 希史

中國近代の都市と農村 班長 森 時彦

五ヶ年計劃の四年目をむかえた本研究班は、都市と農村の關係を主軸に中國近代史を長いタイムスパンで縦斷的にとらえなおし、前近代から現代にいたる中國社會の變動を巨視的に分析する視座の形成をめざしている。本年度は、中國の傳統社會がもつとも早く西歐近代の衝擊に反應した地區である長江、珠江の兩デルタ地域を對象とする研究報告が過半数を占めた。これらの報告は、兩地域においてウェスタン・インパクトはいかに中國社會に浸透したか、傳統的な農村の社會關係は近代化の中でいかに變化したか、その變化が農村の都市化をいかに促進したか、さらに農村手工業はいかに近代的工業システムに包攝されていったか等等の問題をめぐって、從來の知見を書き換えるとともに、本研究班の收斂していくべき方向を指し示すものもある。なお一月二六日には、中國社會科學院近代史研究所の虞和平氏に「清末以後城市同鄉組織形態的現代化―以寧波旅滬同鄉組織爲中心」というテーマで講演していただいた。

一月一九日 「張愛玲」現象を評す 金 文京

二月 二日 中國農村生活空間の變容―村落の耕地分布の現代的編成― 小島 泰雄

二月一六日 近代江南市鎮の共同性に關する豫備的考察 濱島 敦俊

三月 一日 光緒新政の政策決定の背景 中村 哲夫

四月二六日 武進工業化と城鄉關係 森 時彦

五月一〇日 中國共產黨における都市と農村―都市政黨から農村政黨への轉換をめぐって― 江田 憲治

五月二四日 清末都市財政の集權と分權 細見 和弘

六月 七日 現代中國における戶籍制度と農民 張 玉林

六月二二日 抗戰前中國電力産業の基本動向―江蘇省における考察― 一九二五〜一九三七年― 金丸 裕一

七月一二日 馬賊・巡防隊・警察―清末奉天

における治安維持と辛亥革命

澁谷 由里

一〇月二一日 汪精衛南京政府下の新國民運動

柴田 哲雄

一〇月二五日 珠江デルタにおける都市と農村の間—南海縣佛山鎮と順德縣龍山鎮の性格—

片山 剛

一月 八日 近代廣東東部のキリスト教教會と農民協會

蒲 豊彦

一月二二日 湖南、廣西兩省における中國工業合作運動

菊池 一隆

一二月 六日 民國時代の家庭と女性の理想像—良妻賢母主義をめぐる評價—

西川 眞子

北朝後半期佛教思想史研究

班長 荒牧 典俊

北朝後半期佛教思想史が、道融の成實學、玄高の華嚴三昧、曇無讖の菩薩戒を融合させた「菩薩戒運動」として展開しはじめたことを確認した後、つづいて、それが、南朝傳來の『勝鬘經』『涅槃經』『楞伽經』など、及び菩提流支譯『十地經論』などを受容して、いわゆる地論宗教學へと發達し、さらには天台宗・華嚴宗教學へ發達することを文献上に實證するために、北朝期敦煌寫本、スタイン文書六一三及び四三〇三のテキストを確定し、訓讀する作業を行っている。それが終了した後、それらのテキストに注解を加える豫定である。あわせて、つぎの研究發表を行った。

一〇月 四日 『目連問戒律中五百輕重事』と

卑摩羅叉『雜問律事』

船山 徹

一〇月一八日 トゥルファン石窟と觀佛三昧海經の成立について

山部 能宣

一月 一日 智顛と法藏

木村 宣彰

一月二五日 中國佛教とは何か—「祖師西來意」の意味するもの—

荒牧 典俊

二月一三日 Mark. Allon, "The stylistic features of Early Buddhist texts and their importance in the study of formation, history and function of the literature, Peter A. Schwaband, "Direct and indirect cognition and the definition of pramana in early Tibetan epistemology"

Michael Zimmermann, "The tatthagatarhasutra: some philological and philosophical considerations,"

近代東アジア世界の構造連關

班長 山室 信一

近代東アジア世界とは、いかなる意味において他の地域と異なった位相をもち、その中で日本はどういう機能をもってきたのか。一六世紀以降、現代に至る長いタイム・スパンを取ってヒト・モノ・思想・文學そしてそれらについての觀念などの相互交渉の實態を明らかにしながら検討を重ねてきたが、第四七回研究會をもって終了した。その成果は報告書として公刊を豫定している。

班員 飛鳥井雅道 石川禎浩 落合弘樹 籠谷直人 齋藤希史 佐々木克 瀧井一博 狭間直樹 水野直樹 森 時彦 安富 步 山本有造 ロナルド・トビ(以上所内) 塚本 明(三重大)

二月二九日 第一次大戦期における對外政策の構造變化について

古屋 哲夫

二月 五日 「日本植民帝國」と東アジア

山本 有造

二月一九日 日本綿業の發展にはたした「アジア城内貿易」商の役割

籠谷 直人

三月 四日 明治初年の外征論

落合 弘樹

三月一八日 幕末の尊攘論と尊攘派

佐々木 克

日・中・朝間の相互認識と誤解の表象

班長 山室 信一

日本・中國・朝鮮の三國間には隣接した政治社會として相互の位置づけをめぐって認識上のギャップが存在し、それが時に政治的對立そのものの要因とさえなってきた。もちろん、その背景には様々な事情があり、これを解消することは容易ではない。だが、そうした認識ギャップや誤解が、いかに歴史的に形成され、いかに反復・傳承されてきたか、を洗い出し、その克服の方途を探ることは今日いっそう必要となってきた。本研究では自民族中心主義そのものを前提としつつ、新たな民族間の相互認識がいかにして創出しようかという問題意識に立つて試行的議論を重ねている。

班員 飛鳥井雅道 石川禎浩 落合弘樹 籠谷直人 齋藤希史 佐々木克 瀧井一博 狭間直樹 水野直樹 森 時彦 安富 步 山本有造 ロナルド・トビ(以上所内) 塚本 明(三重大)

二月二九日 第一次大戦期における對外政策の構造變化について

古屋 哲夫

二月 五日 「日本植民帝國」と東アジア

山本 有造

二月一九日 日本綿業の發展にはたした「アジア城内貿易」商の役割

籠谷 直人

班員 飛鳥井雅道 石川禎浩 岩井茂樹 落合弘樹 籠谷直人 齋藤希史 佐々木克 ジョシユア・フォーゲル 瀧井一博 狭間直樹 水野直樹 森 時彦 安田敏明 安富 歩 山本有造(以上所内) 河田梯一 陶 徳民(以上關西大) 季 衛東(神戸大) 西村成雄(大阪外大) 吳 宏明(精華大) 文 京殊(立命館大) 藤永 壯(大阪産大) 服部龍二(神戸大・院)

五月二〇日 認識と誤解をめぐる課題と方法について 山室 信一

六月二四日 日朝相互認識をどうみるか? 共同研究班の方向づけをめぐる一

九月三〇日 近代における日本人の中國旅行記 ジョシユア・A・フォーゲル

一〇月一四日 明治前期日本の華僑觀 籠谷 直人

一〇月二八日 シンポジウム検討會—シンポジウムと班員のテーマの設定—

十一月二一日 親日派・對日協力者の論理と日本認識 水野 直樹

十一月二五日 漢學者と明治文化の輸出—西村天因の清國新教育推進論的特質— 陶 徳民

一二月 九日 極東の過剩防衛の循環における言説の作用—「ノー」の語り手と聞き手の關係を中心に— 季 衛東

「大東亞共榮圈」の經濟構造 班長 山本 有造

先の山本班『滿州國』の研究の終了をうけ、對象を「大東亞共榮圈」に廣げようとしたものであるが、當面は經濟史に分析對象をしぼり、日cative な共同研究を行いたい。できれば、いずれ豫定する『大東亞共榮圈』の研究のための準備的性格をも持たせたいと考えている。現在、水曜日隔週に研究会を開いている。

なお本年度は最終年度にあたり、報告論文集を準備中である。

異言語接觸の場としての十九世紀日本

班長 齋藤 希史

本研究は、十九世紀の日本という時空間をさまざまな言語が接觸・混淆した場としてとらえ、そこで何が生まれ、また消えていったのかを考えるものである。本年度は、先次の飛鳥井班よりの懸案であった『注釋漂流紀事』の出版も果たし、また、従来はつきりとは確認されてこなかった二葉亭四迷譯『あひびき』のロシア語底本(そしておそらくは二葉亭手澤のもの)を確定するなどが、斯界にいささかなりとも貢献することができた。各班員の報告も、共通の問題意識のもとにより深化したものとなっている。なお、本研究班は一九九七年三月をもって終了するが、報告書は一年後の九八年三月公刊をめどとし、原稿検討のための會合も、九七年度中に何回か行なう豫定である。

東アジアの日常における兩界媒介事象の比較研究

班長 三浦 國雄

本研究班は、班員各自の固有のテーマを八媒介Vの観点から再編成するという、一種のストラ

ップ・アンド・ビルド方式でやってきたが、最終年に入った本年度は、自己の穴倉からもう一步、共通テーマの野原の方へ踏み出るように心掛けてもらった。その結果、逆に八媒介Vという視點から新たにテーマを見出した班員も現れたし、共通テーマに對する認識もたがいに深まったように思われる。この勢いを論集に收斂したいが、論集刊行後も八媒介Vのテーマは、各班員の胸中で鳴り續けるだろうという豫感がする。本年度も釜鳴神事等、野外研究会(野遊)を時折挿んで研究班の活性化を企てた。なお、研究報告と並行して進めてきた『簞篋内傳』の輪讀は全卷完讀にまでは至らなかったが、折角の蓄積を本研究班の成果の一つとして残せないものかと、目下思案中である。輪讀の過程で、『冠註大全』という特異な註解書が新たな研究對象として浮上してきたことを付け加えておきたい。

班員 井波陵一 木島史雄 金 文京 齋藤希史
ブリギッテ・シテীগ 瀧井一博 ロナルド・トビ
藤井正人 藤田隆則 横山俊夫(以上所内)
北島直文(食糧科學研) 藤井讓治(文學部) 梅谷繁樹(園田學園女子大) ミヒヤエル・キンスキー(同志社大) 後藤靜夫(國立文學劇場) 塚本 明(三重大) 都築晶子(籠谷大) 西山 克(京都教育大) 羽賀祥二(名古屋大) 原田禹雄(もと邑久光明園) 深澤一幸(大阪大) 藤井弘章(京大・人間環境・D1)

一月二〇日 貞室『かたこと』考

横山 俊夫

二月 三日 日清戦争記念碑論 羽賀 祥二
神道大系本『篋篋内傳』

「十死一生日」〜「道虚日之事」
横山 俊夫

日本型華夷論の再検討―儒教世界の中の中・近世移行期
ロナルド・トビ

二月二二日 神道大系本『篋篋内傳』
「一切不成就日事」〜「八專之閑日之事」
深澤 一幸
古代人と眠り
ブリギッテ・シテীগ

四月二〇日 神道大系本『篋篋内傳』
「太歳神前後對位事」
藤井 讓治
異性装と御釜 西山 克

五月二一日 神道大系本『篋篋内傳』
「一二月凶會日事」三浦 國雄
大姐見喜 井波 陵一

五月二五日 神道大系本『篋篋内傳』
「大將軍遊行事」〜「土公出入依居座大土小土事」都築 晶子
龍燈と聖地 藤井 弘章

六月二二日 神道大系本『篋篋内傳』
「土公變化之事」〜「追加」
原田 禹雄
詩人と女仙 深澤 一幸

六月二九日 神道大系本『篋篋内傳』
「二季彼岸事」〜「四季土用事」

七月一三日 一遍上人について 齊藤 希史
神道大系本『篋篋内傳』
「土用閑日事」〜「三伏日事」
金 文京

九月二八日 回顧と展望 三浦 國雄
神道大系本『篋篋内傳』
「五寶日沙汰事」 梅谷 繁樹
琉球を守護する神 原田 禹雄
神道大系本『篋篋内傳』
「同五掟時事」 西山 克
東アジア諸王權の媒介現象 金 文京

一〇月二六日 神道大系本『篋篋内傳』
「三寶上吉日事」丙寅〜庚寅 木島 史雄
黃婆論 三浦 國雄

一〇月二九日 神道大系本『篋篋内傳』
「三寶上吉日事」甲午〜己酉 深澤 一幸
大ざつしよ再論 横山 俊夫
通書玉匣記初探 三浦 國雄

一一月一六日 神道大系本『篋篋内傳』
「三寶上吉日事」甲午〜己酉 深澤 一幸
大ざつしよ再論 横山 俊夫
通書玉匣記初探 三浦 國雄

一一月三〇日 國家學會の盛衰 瀧井 一博
餅の媒介機能 北畠 直文
一九世紀日本社會と記念碑文化 羽賀 祥二

一二月 七日 轉換期における個人と組織 班長 佐々木 克

轉換期における個人と組織 班長 佐々木 克

この研究班は、主として明治維新时期を生き、有名、無名の群像のライフスタイルを明らかにすることを課題としてきた。そのなかでとくに注意してきたことは、個人の傳記的研究をめざすのではなく、轉換期における、社會ならびに組織と個人とのかわり、という問題に比重を置いて、個人を見つめてきたことである。個人の生活史を集合し、検討を加えることによって、その時代の社會のイメージとその斷面を、浮き彫りにすることが出来ると思つてゐる。研究會は九六年三月で終了し、現在報告書作成のための原稿を、班員各自が執筆中である。

班員 飛鳥井雅道 落合弘樹(以上所内) 藤井讓治(文學部) 青山忠正(佛教大) 池田 宏(滋賀縣立圖書館) 奥村 弘(神戸大) 小股憲明(大阪女子大) 勝部眞人(廣島大) 鈴木祥二(名古屋大) 鈴木榮樹(京都樂大) 谷山正道(天理大) 辻ミチ子(京都文化短大) 塚本 明(三重大) 原田敬一(佛教大) 母利美和(彦根城博物館) 藪田 貫(關西大) 手島一雄 岸本 覺(以上立命館大院生) 三澤 純(廣島大院生) 沈 箕戴(京都大院生) 明治維新时期の社會と情報 班長 佐々木 克
明治維新时期は、おおまかに幕末の舊體崩壊期と、明治の新國家建設期とに二分できる。しかし何れにしろ、變革期であり動亂期である。權力は動搖し、社會は流動化し人が激しく動き、そして噂・流説などさまざまな情報飛びかう。そこで、權力も組織も人も、情報を求め、必要とし、かつ自らも発信してゆく。幕府や藩當局は、それぞれ

獨自の、情報蒐集システムを持っていた。しかし傳統のシステムだけでは、新たな状況に對應出來なくなる。また幕府は政治や外交に關しては、情報統制を基本としてきたが、それが崩れて行く。そうしたなかで、知識人や在村のエリート達が、獨自のネットワークをもって、情報の蒐集・發信主體として登場し、權力の側は、彼らの存在を無視できなくなる。こうした状況は基本的に、明治期に引き繼がれるが、新たな問題も登場する。それは明治政府が、權力が内包する根源的病として、情報を秘匿・隠匿しようとする基本的性格を維持しながら、一方で、政府は民衆に伝えなければならぬ情報を、如何に早くかつ廣く傳達・徹底させるか、すなわち情報公開という重要な課題に直面するのであり、こうした状況のなかで、民衆自體も、新たな課題に就くことを迫られるのである。本研究は、以上のような實態をふまえて、明治維新という變革期における「情報」にかかわる諸問題を、総合的に検討してみようと思圖しているものである。

班員 飛鳥井雅道 落合弘樹(以上所内) 青山忠正(佛敎大) 奥村 弘(神戸大) 小股憲明(大阪女子大) 勝部眞人(廣島大) 齊藤祐司(彦根城博物館) 鈴木祥二(名古屋大) 鈴木榮樹(京都藥大) 谷山正道(天理大) 塚本 明(三重大) 原田敬一(佛敎大) 母利美和(彦根城博物館) 山崎有恒(立命館大) 岸本 覺(立命館大) 三澤 純(廣島大) 院生)

四月二六日 文久三年八月一八日政變と薩摩

五月三十一日 密偵莊村省三と不平士族 佐々木 克

六月二八日 一九世紀地域社會と「古代」情報 落合 弘樹

七月九日 明治一四年政變直前期における政府と新聞 鈴木 祥二

九月二七日 近世後期における薩長「藩祖」調査 岸本 覺

一〇月二日 王政復古と薩摩藩 佐々木 克

十一月五日 新政反對一揆と情報 谷山 正道

十二月 六日 幕末期彦根藩の動向と宇津木六之丞 母利 美和

象徴主義の研究 班長 宇佐美 齊

四年間の豫定で一九九三年四月より發足したこの研究班の目標と活動内容の概略は、以下の通りである。

フランスを中心とするヨーロッパの文學テクストを主な対象として、象徴主義が提起した問題とは何かを問うことから始めた。その際、音楽・美術・演劇などの諸藝術との關わり、政治や社會の變動が及ぼした影響、思想的なコンテクスト、および中國・日本など非ヨーロッパ諸國との比較對象の視點をも重視し、より廣い視點からも考察するようにつとめ、ついで、それらの諸問題がその後どのような展開を遂げたかを考えてきた。したがって、時代區分としては當初の計劃通り、一九世紀中葉から一九二〇年代までを視野に入れて研

究を行った。また同時に、分析哲學、精神分析學、社會人類學など人文諸科學における象徴理論についても合わせて考究してきた。研究會は原則として各週で開催され、口頭發表と討議がなされた。

現在、一九九七年春をめどに成果報告書の準備が着々となされ、そのため一九九六年一〇月からは原稿檢討會が行われている。

コミュニケーションの自然誌(二) 班長 谷 泰

一九九七年三月の研究班終了とともに、論文集を出版することをめざして、本年の前半は、各分擔者の執筆内容を中心にした報告を、昨年にひきつづき行なった。その後、執筆が済んだ班員の原稿を順次検討し、論文集としての統一をはかるため、互いの論文を相互引用したり、使用する専門用語を統一したり、索引をつくらしたりする作業を續けた。次年は三月まで、文獻表や索引などの最終チェックに時間を使う豫定である。

班員 田中雅一 串田秀也 藤田隆則(以上所内)

菅原和孝(總合人間學部) 水谷雅彦(文學部) 北村光二(弘前大) 木村大治(福井大) 高畑由起夫(關西學院大) 野村直樹(名古屋市立大) 澤田昌人(山口大) 野村雅一(國立民族學博物館) 早木仁成(神戸學院大) 細馬宏通(滋賀縣立大) 定延利之 山森良枝(神戸大) 宮脇幸生(大阪府立大)

主體・自己・情動構築の文化的特質 班長 田中 雅一

本研究班では、一、近年注目されつつある主體(subject)や自己(self)行爲者(actor)・パーソ

ン、

エージェント、個人 (individual)、アイデンティティ、情動などの概念に着目し、そうした概念の學說史上の背景と意味を探り、二、これら諸概念の民族誌記述(とくに自省的・實驗的民族誌と呼ばれるもの)における有効性などを批判的に検討するとともに、三、通文化的觀點から参加者の専門とする地域の主體や自己などの概念の特徴を考察することを旨とする。三年度ということもあり、さまざまな報告がなされた。

班員 谷 泰 藤田隆則(以上所内) 松田素二(文學部) 菅原和孝(總合人間學部) 栗本英世 田邊繁治 林 勳男(以上民博) 青木惠理子(鈴鹿國際大) 小田 亮(桃山學院大) 春日直樹(大阪大) 川村邦光(天理大) 窪田幸子(大手前女子大) 棚瀬慈朗(滋賀縣立大) 富山一郎(神戸市外大) 中谷哲也(奈良商科大) 西井源子(東京外大) 福補厚子(滋賀大) 渡邊公三(立命館大) 李 仁子 金谷美和 川村清志(以上人・環・院) 中谷純江(金澤大・院) 鈴木健太郎(東大・院)

二月 五日 靈媒師と靈童——パプアニューギニア、ベダムニ族の事例から 林 勳男
二月 一九日 風の音を聴け——セントラル・カラハリ・ブッシュマンの性と生 今村 薫
三月 四日 ヨロongo社會の變容と女性 窪田 幸子
三月 一八日 "Burdensome Gift.": Religious Exchange and the

Position of Nuns 川並 宏子

五月二〇日 戦場の敘述——フランツ・フアンをめぐって 富山 一郎

六月 三日 主體 subjectivity のパラドクス 青木惠理子

六月 一七日 「人類學の危機」とリアリズム的主體の可能性 松田 素二

七月 一日 ハ主體Vはいかに問われたのか?——一九世紀人類學の再検討 渡邊 公三

一〇月 七日 「發端の闇」としての植民地——カゴ・カルトの再検討 春日 直樹

二月 二一日 サテイという主體——北インド寡婦殉死について 田中 雅一

二月 二五日 移住者の文化とアイデンティティの重層性——在日韓國・朝鮮人の墓をめぐる 李 仁子

二月 二日 異議申し立てとしての非婚——パリ女性の結婚と仕事 中谷 文美

二月 一六日 人格の系譜學——マルセル・モースの「人間精神の一カテゴリー」を読む 出口 顯

コミュニケーションの社會史 班長 前川 和也
この研究班は、工業化が本格的に進行する以前のヨーロッパ、東アジア、西アジアでの社會的コミュニケーションの諸問題をとりあげている。今年度は第二年度にあたるが、文字記録、各種の印刷

物、手紙といった情報メディア、中・近世の諸國家や帝國の内外をむすぶ情報流通ネットワークの問題、情報と公權力、近代「公共空間」の成立などが、討論の主トピックであった。

邊—— 班長 井狩 彌介

政治權力と宗教權威との關係は、世界の各文明地域においてそれぞれ独自の様相をもって展開し、その文明の基本性格と密接に結びついている。

古代インドにおいてこの問題は、權力の中心に立つ王と、正統な宗教儀禮傳承を獨占するブラーミン知識階級との關係に典型的に現われる。本研究では、本來は獨立した文獻群として發生した「法典」と「王權政略論」が次第に相互影響を及ぼしつつ歴史的に交差して行く過程を焦點に据える新たな視角から、インド學各分野の専門研究者の協力のもとに、權力と權威との關係構造とその歴史的展開の考察をはかる。敘事詩『マハーバーラタ』の「ラージャダルマ(王法)」章(XII.1-128)に焦點をあて、隔週に行われる研究會ではテキストの會讀形式を中心として研究が進められている。本年度は一二月までに同章(XII.1-3)までの検討を終わった段階で、王權の諸側面が關連文獻の記述との比較のもとに扱われてきた。

班員 荒牧典俊 藤井正人 船山 徹(以上所内) 徳永宗雄 御牧克己 村上昌孝(以上文學部) 赤松明彦(九州大) 永ノ尾信悟 土田龍太郎(以上東京大) 榎本文雄 伏見 誠(以上大阪大) 狩野恭(神戸女子大) 黒田泰司 八木 徹(以上大阪

學院大) 後藤敏文(東北大) 後藤純子(大阪市立大) 島 岩(金澤大) 正信公章(追手門學院大) 高島 淳(東京外大) 中谷英明(神戸學院大) 林隆夫(同志社大) 引田弘道(愛知學院大) 増田良介(大阪外大) 松田佑子(東方學院) 矢野道雄(京都産大) 渡瀬信之(東海大) 乙川文英 杉田瑞枝 野田智子 山下 勤(以上京大・D.C.) 坂本恭子(大阪大・D.C.)

近代社會における研究者の組織化—研究所・學會・學派

一九世紀も後半に入ると、今日われわれが「研究者」と呼びならわしている人々が大量に出現し、さまざまな「研究所」や専門的な「學會」「學派」へと「組織化」されてゆく。この現象を個々の研究所、學會等の検討をつうじて解讀するのが本研究班の基本的な目的である。三年目を迎えた本年も、前年度までと同様、日・米・歐その他の地域を對象に、さまざまな研究所、學會等の具體的な事例が報告され、それぞれのふくむ問題をめぐって議論がなされた。最終年度となる次年度では、これまで積み重ねてきた議論を踏まえたいうえで、研究のまとめを進めてゆく豫定である。

個人研究

東 方 部

宋代官僚制度研究
六朝隋唐精神史
中國近代社會思想研究

梅原 郁
吉川 忠夫
狹間 直樹

南アジア大陸北西地方の歴史考古研究

中國古代の傳承文化研究
原始佛教起源論
中國美術の様式と意味
中國建築の様式・技術・空間
近代中國の綿紡織業
新漢字コード系の構築
道教思想研究
敦煌寫本の言語史的研究
中國古代中世の法制
先秦時代の金文
中國の小説、演劇及び講唱文學の演變

柴山 正進
小南 一郎
荒牧 典俊
曾布川 寛
田中 淡
森 時彦
勝村 哲也
麥谷 邦夫
高田 時雄
富谷 至
淺原 達郎

清代の文化と社會

古代中國の考古學研究
中國科學の基礎理論
明清時代邊境社會史
古代中國における天文學と文化
インド・中國における唯識佛教の基盤と背景

井波 陵一
岡村 秀典
武田 時昌
岩井 茂樹
新井 晉司

中國共產主義運動の歴史と思想

宋元道教研究
明清時代の官僚制度
中國中世學術史の研究
中國小學史
中國佛教美術の研究
前近代朝鮮の政治と社會

石川 禎浩
横手 裕
谷井 陽子
木島 史雄
森賀 一恵
稻本 泰生
矢木 毅

日本近代文化の研究

一九世紀における明治維新
「日本植民地帝國」の經濟史的研究
前近代日本の文明史的研究
近代東アジアにおける日本の法と政治
近代朝鮮の政治と社會
戰前期日本の工業化と華僑ネットワーク
士族の研究
文學と近代
貨幣の研究
ドイツ國家學と近代日本
近代日本の言語政策

飛鳥井雅道
佐々木 克
山本 有造
横山 俊夫
山室 信一
水野 直樹
籠谷 直人
落合 弘樹
齋藤 希史
安富 步
瀧井 一博
安田 敏朗

西洋部

社會的相互行為の解讀
知識と社會制度
シユメール行政・經濟文書の研究
古代インド・ヴェーダ祭式の構造と歴史的展開の研究
フランスの詩學
フランス革命と近代的主體の成立
南アジアの宗教と社會
文學理論の研究
後期ヴェーダ文獻の成立史研究—ブラーフマ
ナからウパニシャッドへ—
初期近代ポーランドの政治文化
音楽の記號論
フランクフルト學派の政治思想

谷 泰
阪上 孝
前川 和也
井狩 彌介
宇佐美 齊
富永 茂樹
田中 雅一
大浦 康介
藤井 正人
小山 哲
藤田 隆則
上野 成利

日本部

中世ヴェネツィアにおける「家」 高田京比子
共和国の法と道徳―フランス第三共和政期に
おける共和思想と新カント派― 北垣 徹
ポール・ヴァレリーと二〇世紀フランスの思想
森本 淳生

東方部研究会

東方學報執筆準備發表

二月 七日 小南 一郎 干實「搜神記」の
編纂をめぐって

二月二八日 井波 陵一 《棟亭五種》の同
校者たち

梅原 郁 宋代の司法行政と
法官

東方學報第六十八册合評會

一〇月一六日 富谷論文

横手論文

一〇月三〇日 井波論文

石川論文

船山 徹

岩井 茂樹

麥谷 邦夫

小南 一郎

事業概況

夏期公開講座―歴史研究の新しい地平―

七月五日

アジアの海と日本―地域の連鎖のなかで動く人
々を見つめて 籠谷 直人

中國の古代を掘る―日中共同發掘の現場から
岡村 秀典

七月六日

土族は没落したか? 落合 弘樹

歴史における事實と眞實―孫文の三民主義と毛
澤東の解釋を例として 狭間 直樹

開所記念公開講演會

一〇月七日

ローレンツ・フォン・シュタインと明治日本
瀧井 一博

王國維の學問について 井波 陵一

ヴァードゥーラ學派の新寫本について―失われ
た古代インド祭式文獻の再發見 井狩 彌介

一九九六年度漢籍擔當職員講習會(漢籍電算處理)
第一日(九月三〇日)

圖書館とマルチメディア(講演)

大型計算機センタ―教授 金澤 正憲

漢字コードの話―漢字と外字の處理―(講義)

大型計算機センタ―技官 小澤 義明

東洋學文獻類目冊子體作成について(講義)

大型計算機センタ―技官 河野 典

計算機處理入門(講義)

大型計算機センタ―技官 隈元 榮子

第二日(一〇月一日)

東洋學文獻類目の編纂とフォーマット(講義)

漢字典と漢字合成法(講義) 村田 康彦

同志社女子大學非常勤講師 丹羽 正之

日中臺における漢字コードの規格(講義)

大型計算機センタ―助手 安岡 孝一

漢字コードの問題點とISO 10646 UCS(講義)

學術情報センタ―教授 宮澤 彰

データベース檢索(一)(實習)

第三日(一〇月二日)

中國佛典電子化の諸問題(講義)

花園大學教授 ウルス・アップ

文書データベースの設計(講義)

大阪國際女子大學教授 桶谷猪久夫

データベース檢索(二)(實習)

第四日(一〇月三日)

インターネットの概要(講義)

經濟學部助教授 中村 素典

インターネットによる情報サービス(講義)

大型計算機センタ―助手 石橋 勇人

データベース檢索(三)(實習)

第五日(一〇月四日)

大學間ネットワークの狀況について(講義)

大型計算機センタ―技官 櫻井 恒正

CD-ROMによる情報サービス(講義)

大阪市立大學教授 柴山 守

一九九六年度漢籍擔當職員講習會(中級)

第一日(一一月一日)

漢籍の話(講演)

黒川 洋一

經部書(講義・實習)

小南 一郎

漢籍實習

史部書(講義・實習) 富谷 至

懷德堂文庫の書物(講義) 高野山大學助教授 岸田 知子

現地實習(一)(懷德堂文庫)

第三日(一一月二三日) 荒地 典俊

子部書(講義・實習)

現地實習(二)(南禪寺金地院)
 第四日(十一月四日)

集部書(講義・實習)

大阪大學教授 福島 吉彦

現地實習(三)(陽明文庫)

第五日(十一月五日)

明清の書物(講義)

東京大學東洋學文獻センター教授 岡本 サエ

所員動靜

- ・高田京比子氏を助手(西洋部)に採用(一月一日付)。
- ・鈴木啓司(西洋部) 助手は、辭任(三月三十一日付)の上、名古屋學院大學講師に就任。
- ・稻葉 穰(東方部) 助手は、辭任(三月三十一日付)の上、龍谷大學助教授に就任。
- ・三浦國雄大阪市立大學教授は、併任教授(比較文化研究部門、四月一日〜一九九七年三月三十一日)。
- ・串田秀也大阪教育大學助教授は、併任助教授(比較文化研究部門、四月一日〜一九九七年三月三十一日)。
- ・岩井茂樹京都産業大學助教授を、當研究所助教授(東方部)に採用(四月一日付)。
- ・北垣 徹氏を助手(西洋部)に採用(五月一日付)。
- ・安田敏朗氏を助手(日本部)に採用(六月一日付)。

・森本淳生氏を助手(西洋部)に採用(九月一日付)。

・田中雅一助教授(西洋部)は、委任経理金により、二月二八日大阪發、コロンボ漁業省に於いてスリランカにおける漁業に關する情報収集、シニ基金研究所に於いて「歐亞フォーラム」出席及び研究交流、ロンドン大學に於いてスリランカの水産資料収集を行い、二月二四日歸國。

・藤井正人助教授(西洋部)は、一月八日大阪發、パニヤール村周邊に於いてサーマヴェーダ傳承の現地調査を行い、一月三〇日歸國。

・高田時雄助教授(東方部)は、文部省科學研究費補助金により、二月一八日大阪發、イタリヤ大使館及びロス家に於いてロス文庫の調査研究を行い、二月二四日歸國。

・山本有造教授(日本部)は、一橋大學經濟研究所(COE)經費により、二月二四日大阪發、ソウル大學經濟學部に於いて「日韓比較長期經濟統計研究會」に出席、二月二八日歸國。

・金 文京助教授(東方部)は、三月七日大阪發、香港中文大學に於いて「粵劇粵語文檢討會」に出席・研究發表を行い、三月一日歸國。

・瀧井一博助手(日本部)は、委任経理金により、二月二〇日大阪發、デューセルドルフ大學、エッセン大學、ウィーン大學、プラハ大學、ベルリン自由大學に於いて明治期日本人のヨーロッパでの國家理論修得過程の研究のための資料調査及び研究交流、シュレスヴィヒ・ホルシュタ

イン州立圖書館、キール大學に於いて資料調査を行い、三月一九日歸國。

・田中雅一助教授(西洋部)は、三月二九日大阪發、シンガポール大學に於いて「アジアの諸宗教についての日本人による研究をめぐって」ワークショップ参加・研究發表を行い、四月一日歸國。

・石川禎浩助手(東方部)は、三月三十一日大阪發、社會科學院近代史研究所、社會學研究所に於いて中國近現代史に關する研究資料の収集を行い、四月六日歸國。

・岡村秀典助教授(東方部)は、三月八日福岡發、荆沙市内に於いて湖北陰湘城遺跡の發掘調査を行い、四月一〇日歸國。

・岡村秀典助教授(東方部)は、四月一九日大阪發、荆沙市内に於いて湖北陰湘城遺跡の發掘調査を行い、四月三〇日歸國。

- ・富永茂樹助教授(西洋部)は、五月一日大阪發、カリフォルニア大學サン・ディエゴ校に於いて國際研究集會「公共空間とデモクラシー」に参加及びフランス革命史に關する資料収集、ケベック大學モントリオール校に於いてセミナー「合理主義と政治哲學」に出席、五月二二日歸國。
- ・藤田隆則助手(西洋部)は、七月一〇日大阪發、サンバ・リカアンアジア典禮・音樂研究所に於いて東アジアの歌唱法の比較研究を行い、八月一〇日歸國。
- ・宇佐美 齊教授(西洋部)は、七月一日大阪

發、ジャック・ドゥーセ文學圖書館及びフランス國立圖書館に於いてフランス近代詩に關わる草稿研究、トゥールーズ・ル・ミライユ大學に於いて「日本におけるフランス近代詩の受容」に關する研究集會出席、八月二二日歸國。

・麥谷邦夫助教（東方部）は、國際研究集會研究員派遣旅費により、八月一日大阪發、五洲大酒店に於いて「道家文化國際學術シンポジウム」に出席、八月一七日歸國。

・金 文京助教（東方部）は、八月二六日大阪發、韓山書院に於いて「饒宗頤學術檢討會」に出席、研究發表、香港大學に於いて香港文學に關する資料集會を行い、八月二三日歸國。

・前川和也教授（西洋部）は、七月五日大阪發、大英博物館に於いてシュメール楔形文字文書の研究を行い、八月二四日歸國。

・谷泰教授（西洋部）は、七月二四日大阪發、ブカレスト民族學博物館、トランシルヴァニア民族學博物館及びビストリツァ地方、ベルガモ縣北部山村に於いて牧民文化關係資料集會を行い、八月二八日歸國。

・荒牧典俊教授（東方部）は、九月二日大阪發、ドイツ惠光寺日本文化センターに於いて「因果律に關する佛教シンポジウム」に出席、研究發表、ライデン大學に於いて「J. Vetter 教授と原始佛教に關する研究討論、ハンブルグ大學に於いて L. Schmitzhausen 教授と佛教起源論に關する研究討論、デュッセルドルフ大學に於いて V. Bech 教授と中國における佛教受容に關する

研究討論を行い、九月二二日歸國。

・梅原 郁教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金により、八月二九日大阪發、民族學博物館及び東アジア博物館に於いてスヴェン・ヘデイン將來品の調査研究及び資料集會、フランス國立圖書館に於いてペリオ收集敦煌寫本の閱覽及び資料集會を行い、九月一八日歸國。

・安富 步助手（日本部）は、文部省在外研究員旅費により、三月二九日大阪發、ロンドン大學經濟學部に於いて大自由度力學系としての經濟の研究を行い、九月二七日歸國。

・高田時雄助教（東方部）は、九月二四日大阪發、甘肅工業大學接待中心に於いて「中國敦煌吐魯番學學術討論會」出席、上海圖書館に於いて敦煌關係資料集會を行い、一〇月三日歸國。

・高田京比子助手（西洋部）は、一〇月三日大阪發、パドヴァ大學、ヴェネツィア國立古文書館に於いてイタリア中世史に關する調査を行い、一〇月一五日歸國。

・森本淳生（西洋部）助手は、一〇月一五日本大阪發、パリ第一二大學、フランス國立圖書館に於いてポール・ヴァレリーに關する調査・資料集會を行い、十一月一日歸國。

・森賀一恵（東方部）助手は、文部省科學研究費補助金により、一〇月二七日大阪發、ローマ國立圖書館、フィレンツェ國立圖書館、ポロニヤ大學、ヴェネツィア國立圖書館に於いて漢籍調査及び宣教師の手になる中國語史資料の研究を行い、十一月九日歸國。

・高田時雄（東方部）助教は、文部省科學研究費補助金により、一〇月二七日大阪發、ローマ國立圖書館、フィレンツェ國立圖書館、ポロニヤ大學、ヴェネツィア國立圖書館に於いて漢籍調査及び宣教師の手になる中國語史資料の研究を行い、十一月五日歸國。

・田中 淡（東方部）教授は、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金により、一〇月三二日大阪發、大明宮含元殿發掘現場に於いて「大明宮含元殿遺跡修復事業専門會議」に出席、社會科學院考古研究所に於いて資料調査を行い、十一月三日歸國。

・藤田隆則（西洋部）助手は、八月二五日本大阪發、イリノイ大學音樂學部、コーネル大學に於いて東アジア傳統音樂の傳承様式についての研究、ハワードジョンソンに於いて「民族音樂學會」に出席、十一月一八日歸國。

・稻本泰生（東方部）助手は、文部省科學研究費補助金により、十一月一五日本大阪發、インド美術館に於いて博物館遺物調査、プリンス・オブ・ウェールズ博物館、エレファンタ、カネリーに於いて博物館遺物調査及び佛教遺跡調査、アウランガバード、エローラ、アジャンター、バージャー、ベドゥッサーに於いて佛教遺跡調査を行い、十一月二九日歸國。

・船山 徹（東方部）助手は、文部省科學研究費補助金により、十一月一五日本大阪發、インド美術館に於いて博物館遺物調査、プリンス・オブ・ウェールズ博物館、エレファンタ、カネリー

に於いて博物館遺物調査及び佛教遺跡調査、ア
ウランガバード、エローラ、アジャンター、バー
ジャー、ベドゥッサーに於いて佛教遺跡調査を行
い、一月二十九日歸國。

・栗山正進(東方面) 教授は、文部省科學研究費
補助金により、一月二十二日大阪發、タキシラ
遺跡に於いて佛寺構成要素の現地調査を行い、一
二月六日歸國。

・岡村秀典(東方面) 助教授は、文部省科學研究
費補助金により、一月三〇日大阪發、大英博
物館に於いてガンダーラ遺物の調査を行い、一
二月十一日歸國。

・勝村哲也(東方面) 助教授は、文部省科學研究
費補助金により、二月二十六日大阪發、香港中
文大學、マカオに於いてヨーロッパ人の中國探險
に關する資料収集を行い、二月二十九日歸國。

・曾布川 寛(東方面) 教授は、委任經理金によ
り、二月二十七日大阪發、中央研究院歴史語言
研究所、故宮博物院に於いて中國美術資料の収集
を行い、二月三〇日歸國。

外國人研究員

・Joshua Andrew Fogel カリフォルニア大學
サンタバーバラ校教授

中國史・近代日中關係史の研究
(日本學客員部門)

受入教官 山室助教
期間 六月二〇日〜一九九七年五月三十一日

・Paisley Nathan Livingston マックギル大學教授

西洋近代における文學・藝術の學際的研究
(比較社會客員部門)

受入教官 富永助教
期間 一月一〇日〜八月三十一日

・楊鴻勳 中國社會科學院考古研究所研究員
中國建築史・庭園史の研究
(比較社會客員部門)

受入教官 田中教授
期間 九月一〇日〜一九九七年四月九日

招聘外國人學者

・Anne Mette Hfort マックギル大學助教授
ポスト構造主義以後の文學理論

受入教官 大浦助教
期間 一月一〇日〜八月三十一日

・G. Aurora Testa
ナポリ東洋大學アジア研究科研究員
唐洛陽城の考古學的研究

受入教官 栗山教授
期間 二月一日〜三月三十一日

・國慶華 チャルマス技術大學研究員
中國及び日本建築の研究

受入教官 田中教授
期間 五月二〇日〜一九九七年五月十九日

・Ronald Paul Toby イリノイ大學教授
日・中・朝間の相互認識と誤解についての研究

受入教官 山室助教
期間 六月一日〜七月一日

・何培斌 香港中文大學副教授

唐代佛教建築と日本佛寺の比較研究

受入教官 田中教授
期間 六月三日〜八月十五日

・Tansen Sen ペンシルヴァニア大學助手
唐宋時代中印交渉史の研究

受入教官 栗山教授
期間 六月二〇日〜一月三〇日

・Joan E. Judge ユタ大學助教授
臣民から市民へ―明治日本と清末中國における
「民」概念の變容―

受入教官 狹間教授
期間 六月二十七日〜一九九七年六月十九日

・Mark W. Allon ロンドン大學講師
原始佛教經典の傳承過程の研究

受入教官 荒牧教授
期間 七月八日〜二月三十一日

・Francoise Bottero
フランス國立科學センター研究員
漢字の特質とその諸問題

受入教官 高田助教
期間 七月八日〜一九九七年七月七日

・張寶三 國立臺灣大學副教授
日本近代京都學派中國經籍研究述論の研究

受入教官 金助教
期間 八月一日〜一九九七年七月三十一日

・Klaus Kracht ベルリンフンボルト大學教授
日本のクリスマスについての社會史的研究

受入教官 横山助教
期間 九月四日〜一〇月三十一日

・Livia Kohn ボストン大學準教授

中國中世における道教の戒律の研究

受入教官 吉川教授

期間 九月一日〜一九九七年八月三十一日

外国人研究生

・Wolfgang Lehnert フォルハ建築事務所建築

技師

一九世紀日本における住宅の變容と壁の構法

受入教官 田中教授

期間 四月一日〜一九九八年三月三十一日

出版物

紀要

人文學報 第七十七號(紀要第一二九册)

一九九六年一月三十一日刊

人文學報 第七十八號(紀要第一三〇册)

一九九六年三月三十一日刊

東方學報 第六十八號(紀要第一二八册)

一九九六年三月三十一日刊

歐文紀要 第三〇號

一九九六年三月三十一日刊

東洋學文獻類目 一九九三年度

一九九六年三月三十一日刊

研究報告その他

明末清初の社會と文化

小野 和子編

一九九六年三月三十一日刊

注釋漂荒紀事 飛鳥井雅道・齋藤 希史編

一九九六年四月二十五日刊

元史百官志索引

一九九六年三月二十九日刊

所報「人文」第四二號

一九九六年三月三十一日刊

徳永 洋介編